For my birthday

作= gembu



美也子は焦っていた。彼女は来年で40歳になる。

飲んだくれてくだをまき涙の一つもこぼすことはなかった。 に飲んだくれの父を捨て単身上京した。祖母が癌で入院したときも、葬式の時も、 小さい頃から貧乏な家で育った彼女は、一人で彼女を育ててくれた祖母が、癌で死んだのを期 美也子の父は、

関係が、 なかったわけではない。美人では無いが、 めで自分の店を持つ事もできた。そして、 った。だが、客とけっして深い仲にはならない、それが彼女のポリシーだった。 ような境遇の人間が多く、 めは父のこともあり男性不信に陥っていた彼女はホステスという仕事には、かなり抵抗があった 上京したとはいえ、彼女にあてがあるわけではなく、 美也子のつとめるクラブは割とマナー 1年もしたころにはホステスとして安定した生活を送ることが出来るようになっていた。初 彼女に仕事に対する誇りを持たせていた。脇目もふらず働くうちに、クラブのママの進 想像していたようなギスギスした関係はなく、 気がつけば彼女は30になっていた。言い寄る男がい かわいらしさを持つ彼女に惚れ込む客は後を絶たなか の良い客が多かったのと同僚のホステスに自分と似た 半分ホー ・ムレスのような生活をしながら 家族のような穏やかな

自分の店を持ち、

ママと呼ばれるようになっても、

美也子は上京した時に住み始めた6畳一間

- 2 -

のアパ ったが、仕事が急がしくて、 ートに住んでいる。 特に深い意味がある訳ではなく、 そのうちに面倒になってしまっていたのだ。 彼女自身せめて風呂のある所へと思

の勧めだった。 その日、 彼女は自分の店を持って初めて休みを取った。美也子の働き過ぎを心配した店の子達 店も安定し、 任せられる子もできたことだし、 美也子は素直に従うことにしたの

久しぶりに部屋の大掃除をし、 テレビを見ながらゆっくりとコーヒーを飲んでいた。

「今度からは、 定期的に休みをもらおうかしら」

穏やかな日だった。

隣の部屋のドアが開いた。 晩のおかずを買いに近くの えー パ まで買い物へ行こうと、 玄関ドアに鍵をかけた時、 不意に

「あっ、こんにちわ」

部屋から出てきたのは、 20歳くらいの若い男だった。

「こんにちわ」

美也子は反射的に挨拶を返した。

「どうも、 初めまして、 今度隣に越してきた川原です。 ちょうど挨拶に行こうと思ってたんです

けど、お出かけですか?」

どこか地方から来たらしく、 標準語を喋っていたが、所々なまっていた。

「えぇ、ちょっと近くまで、買い物にいこうとおもって」

「ああ、そうですか、じゃぁ、また後で、改めて伺わせてもらいますわ」

そういってニカッと笑うと部屋へ引っ込んでいった。

川原勲20歳、 なんでもアクションスターになるために大阪から出てきたのだそうだ。

「あほみたいなこと言ってますけど本気なんですよ」

小さい頃からキックボクシングをやっていたらしく、 しなやかな良いからだをしている。

- 4 -

目ではないが、伊原剛志似のなかなかの男前だった。 一目惚れだった。

「いい年をして・・・」

相手は自分よりも10歳も年下だ、

「自分には釣り合わない」

何度も自分に言い聞かせたが、気持ちは日増しに募るばかりだった。仕事も手に着かなくなり

店の子達にまで心配を掛けてしまっていた。

「このままではいけないわ」

美也子は自分の気持ちにけりをつけようとだめもとで告白しようと決心した。

以外にも、勲は彼女の気持ちを受け入れてくれた。

「すんません、自分がもう少し早く告白しとればよかったんですけど…すんません」

勲はしきりに謝っていた。美也子は幸せだった。

それだけにたまに会える日が愛おしかった。 シングのジムに通う勲の二人は隣にいながら、なかなかあうことが出来ない日々が続いていたが、 相変わらず多忙な美也子と、俳優になるための稽古と生活のためのバイト、さらにキックボク

「自分は30になるまで結婚しない。それでもええか?」

10歳離れている自分は彼が30になるころには、 40になってしまう。 それでも美也子は夢

を追う彼の邪魔をしまいと黙ってうなずいた。

美也子を焦らせているのは、ここへ来て彼の態度が変わってきたことだ。明らかに彼女を避けて をもちだした。 そうこうしている内に彼女は39歳の誕生日を迎えた。だが、 彼女の誕生日に勲は別れ話

0になるまでは結婚しないっていうから、私はこれまで黙ってついてきたんじゃないの。それ 「なんでなの、 他に好きな子でも出来たの? 来年で40になっちゃうのよ! あなたが3

が... なんでなのよ!」

ワシは待っててくれゆうた覚えはないで。それでもいいんか? うたんやないか。 「別に好きな子が出来たわけやない。ただ、気がなくなってしもうたんや。それだけや。 おまえが幾つになろうがワシの知ったことちゃない。まぁ、ええお隣さんでい 聞いたら、おまえが、ええちゅ

「そんな・・・」

苦痛だった。ふさぎ込む彼女を店の子達は心配していた。本気で自分を心配してくれる店の子達 に彼女は自分のつらい胸の内を打ち明けた。 それっきりだった。勲の方は言葉どおり本気でいいお隣さんに徹していた。 いつものように笑顔で挨拶をしてくる。まるで、なにもなかったように。それが美也子には たまに廊下であえ

- 6 -

「ひどい!」

「そうよ、ひどすぎるわ! それでママはどうするつもりなの?」

「どうって、どうしようもないじゃない」

「だめよ、それじゃ!女をなめてるのよ!」

「そうよ! そんな男にはおもいしらせてやらなきゃ!」

確かにそうかもしれない、 だんだんと美也子の中に怒りがわき上がってきた。

- 5 -

「でも、どうしたらいの?」

|裁判よ、裁判!|

「だめよ。そんなの! どうせ、はした金もらってはい終わりよ!」

「じゃぁ、どうするのよ!」

「叩きのめすのよ!」

「叩きのめすって、相手は男よ! しかも、 ずっとキックボクシングやってたんでしょ? 無理

に決まってるじゃない!」

「だからこそよ! そういう男は絶対に男が女に負ける分けないと思ってるのよ。 その思い上が

りを叩きつぶしてやるのよ!」

「だからってどうするのよ?」力でかなうわけがないじゃない」

「私の知り合いにキックボクシングをやってる子がいるのよ。女の子なんだけど、 彼女よく言っ

てたわ、確かに力じゃかなわないけど、頭を使えば女でも十分に男と渡り合えるって」

「でも…」

「大丈夫よママ。とにかくやるだけやってみなきゃ! このままじゃくやしいじゃない!」

「そう、そうね。このままじゃくやしいわ! かなわないにしても、 一発くらい殴ってやらなき

や気がすまないわ!」

そうよ! じゃぁ、私、彼女に連絡取ってみるわ!」

「ええ! おねがい!」

こうして美也子の復讐のレッスンが始まった。

一年が過ぎ、美也子の40歳の誕生日が来た。

「お久しぶりね」

ああ、こんにちわ」

相変わらず勲は、何事もなかったような顔をしている。訛りはだいぶ抜けたようだ。

「今晩私のお店でパーティーをやるんだけど、来ていただけないから?」

「はぁ?」

予想外の誘いに勲は面食らった。

「それとも、昔の女の店に来るのは怖いのかしら?」

美也子は腰に手をあて挑戦的な目で勲を見た。

「はぁ? なんで、女なんか怖がらなあんのや。」

「あら、男らしい。じゃあ来ていただけるのね。きっと楽しんでいただけるとおもうわ。12時

に私のお店でまってるわ。もし、 もし万が一にも、怖くなって来たくなくなったら11時半まで

にお電話いただけるかしら?」

「女なんぞ怖ないゆうてるやろ! 忙しいけどいったるわ! 寂しい女を慰めると思ってな。

ゆうなればボランティアやな」

「あら、ありがとう。じゃあお待ちしてるわね」

勲は強がって見せたが、 動揺は訛りに現れていた。

思い知らせてやるわ。美也子の目が光った。

「ここやな」

時間どおりに勲は美也子の店についた。 一瞬躊躇したが、ドアノブに手を掛けると手前に引い

「はん?」

広々とした店内の真ん中にリングがあった。 きらびやかな店内にそのリングは明らかに浮い

- 9 -

いた。

「いらっしゃい。よく来てくれたわね」

向かって右側にあるカウンタの中に水色の着物を着た美也子がいた。

「なに飲む? 安心して。招待しておいてお金を取ろうなんて考えてないから」

「払え、言うてもはらうかいな。とりあえず、ウイスキーもらおうか。ストレートでな」 なんやねんあのリングは? ふられた恨みをリングで晴らそうちゅうんか?」

勲は出てきたウイスキーを一気に飲み干し、大笑いした。

「あら、良くわかったわね。そのとおりよ」

「おもしろいじょうだんやな」

「わたしは、本気よ。それとも私とやるのは、こわいのかしら?」

「はぁ? 正気かいな?」

美也子は返事をする代わりに、 黙ってグローブを出した。 ボクシングのグロ ブではなく、

·プンフィンガーのグローブだ。

「トランクスもあるわよ」

「おもしろい。 本気なんやな」

そういって。赤いボクシング用のトランクスを出した。

「さっきから、そういってるでしょ?」

「ええ、度胸や。それとも振られてトチ狂たんか?まぁ、 どっちでもええわ。 おまえが言い出し

たんやから、ボコボコにされても文句言うなや」

そういうとグローブをはめた。

「はい、トランクスもどうぞ」

「ふん、やっすいの買うたのう」

もしなやかな体をしている。 勲はグローブをつけた手で器用に服を脱ぎ捨て、黄色いビキニ一枚になった。30になった今 小さなビキニに納められた股間はプリプリとしていた。

「ふん、要求不満のおばはんには、ちょう刺激が強すぎたかな?」

「あら、人の誕生日に招かれて、手ぶらで来たのかと思ったらそんなものを用意してくれてたの ちょっと物足りないかしら」

「よう、ゆうわ」

った。 そう言うと、美也子の用意したトランクスを履き、 トップロープをひょいと越えてリングにた

「やる気満々ね」

とは思えないような体をしていた。 スルリと帯をほどき、着物を脱ぎ捨てると、黒のビキニ一枚になった。 白い肌は瑞々しく4

「ルールはどうする?」

「ルール?」

「そう。どんなルールにする?あなたの好きなルールで良いわよ」

「ほう、余裕かましとんな。ルールなんぞいらんわ。好きにしいや、 ど| んとうけたるわ。

俺は手だけでええわ。ボクシングでやってやろ」

「随分と見くびられたものね。いいわ、後悔させてあ・げ・る」

美也子は構えた。

「ふん、一丁前に構えなんぞとりおって・・・」

勲はノーガードでリングに立っている

「思った通り、私のことをなめきってるわね。死ぬ後悔するがいいわ」

美也子はパンチを繰り出した。

「ふん、思った通りの素人パンチやな。 何発打ってもワシにはあたらんわ」

女のパンチはモーションが大きい上に明らかに勲の顔だけを狙っていた。やがて、 汗が出始め、パンチも大振りになってきた。 勲は美也子のパンチを上半身の動きだけでさけて見せた。美也子のパンチは掠りもしない。彼 美也子の額に

「なんや、もう疲れたんか?」

「うるさいわね! これからよ!」

そう言いながらも彼女の息が上がっているのを勲は見逃さなかった。 いかに若く見えようと彼

女はもう40だ。

「そろそろ、終わりにしたろか。年寄りには気をつかわんとな・・・。」

軽く一発鼻っ柱にお見舞いしてやろうと、勲は一歩踏みこんだ。

「来た!」

美也子が待っていた瞬間だった。 勲が一歩踏み込んだ瞬間、 彼女は精一杯の力でしゃがみ込ん

「はん?」

じた。 使って一気に飛び上がる。 玉を捕らえた。 全身全霊を込めたアッパーを放った。しゃがみ込んだ状態から、アッパーと同時に前進のバネを 込んだ美也子の目の前には、勲の股間があった。赤いトランクスに包まれた勲の金玉をめがけ、 油断していた勲には、美也子が消えたように見えた。 一瞬だが、 オープンフィンガーのグローブをした美也子の拳は確実に勲の2つの 勲の恥骨と自分の拳に挟まれひしゃげる彼の金玉の感触を美也子は感 一瞬、 勲の動きが止まる。

ないのにそこが男の急所であることを主張していた。 いる。焦点も合わない。全体の景色がぼやけていた。 予想もしていなかった衝撃が勲の股間を襲った。頭の中が真っ白になり目の前には星が飛んで たとえようのない股間の痛みが、

「かはつ、やっやられた・・・っ」

反則であり相手が故意に狙ってくるとは、 に男にダメージを与えることが出来る。スポーツ化された格闘技になれていた勲にとって金玉は の一撃にためだったのだ。たしかに、金玉にクリーンヒットさせることが出来れば、 ない。見え見えのパンチも、顔しか狙わなかったのも、スタミナ切れに見せかけたのも、全てこ 最初から美也子はこれを狙っていた事に彼は気づいた。だが、気づいたところでどうにもなら 思いもしなかったのだ。 女でも十分

「くっ・・・くっそおっ・・・」

がやっとだ。 激しい金玉の いつの間にか勲の体は脂汗で覆われている。 痛みが股間を中心に全身を駆けめぐっていた。 股間を押さえ内股で立っているの

さん?」 「あら、どうし たのかしら?おばさんのパンチ、そんなに痛かったかしら? たくましい お兄

「くっ・・こっこのばばぁ・・・」

前屈みの勲の頭を両手でつかむと膝蹴りをたたき込んだ。

「ぐはぁっ!!」

た。目や鼻を狙って何発も膝をたたき込んだ。教わった通り、口には当てないようにしていた。 パットを付けているならともかく下手に口を狙えば、 美也子の膝は勲の鼻を捕らえたようだ、 彼の鼻から鼻血が流れた。 相手の歯で逆にこっちが傷つくばかりでな だが、美也子はやめなかっ

く、口の中の雑菌のせいで、膿むこともあると教わったからだ。

両目は黒く腫れ、 美也子の膝のラッシュにたまらず勲は顔面をガードしようと、股間に当てていた両手を上げた。 鼻はひしゃげている。

「小さい頃からやってるわりには判断が鈍いんじゃない?」

勲の金玉が再び押しつぶされるのを今度は足の甲で感じた。 ガードになった勲の股間めがけて振り下ろした。正確に足の甲で捕らえたようだ。 美也子は勲がガードを上げたのを見ると、 白い足を後ろに振り上げて勢いを付けると、再びノ 逃げ場のな

「はがあつ・・・つ!」

声にならない悲鳴が勲の口から漏れる。

防備な彼の右の横っ腹に思いっきりつま先蹴りを叩き付けた。 たばたとだだっ子のようにマットを叩き必死に2つの玉から来る痛みに耐えていた。 美也子が手を離すと勲は膝から崩れ落ちた。額をマットに押 しつけ、 丸まったまま、 美也子は無 両足でば

ぐえっ

に寝ころんだまま、軽く痙攣をしている彼の赤いトランクスの中心は不自然に盛り上がっていた。 「あら、元気ねぇ」 蹴られた勢いで勲は仰向けに転がってしまった。完全に白目を向いて気を失っている。 大の字

「やったね、ママ!」

ラをセットしてあり、彼女たちは控え室に設置されたモニターで全て見ていたのだった。 店の奥にある従業引用の控え室から店の子達がぞろぞろと出てきた。実は店のあちこちにカメ

「どうだった?」

「完璧よママ! かっこよかった録画もバッチりしてあるから、 後でみんなで盛り上がろう!」

「OKよ。その前に最後の仕上げをしちゃいましょう」

「おーっ!!」

も巻き付けた。 プに引っかけ、外されないように用意しておいたガムテープを両膝と両肘の所でロープに幾重に 女の子達は、 そして、両手両足を開くように右足を下から2番目のロープの外側に出すようにして引っか 左足も同じように反対側のロープに引っかけて座らせ、 全員で勲を引っきずり、 コー ナーポストを背に座らせてから、 両手はそれぞれ反対側のトップロー 彼の体を持ち上げ

「あっ、トランクス脱がすの忘れてた!」

「いいわ、ハサミで切っちゃいましょうよ」

「なんか、男をハサミで裸にするのってなんか興奮しな~い?!」

「するする。なんか犯してるみたい!」

トランクスもビキニも剥ぎ取られ、コー ナー ·に張り付けにされた勲の股間には彼の金玉が重く

ぶら下がっていた。男根は上を向いたままだ。 「さぁ、はじめましょうか。 あなた達は控え室にお戻りなさい」

「はーい」

女の子達はまたぞろぞろと部屋へと戻っていった。

万が一、勲が警察に駆け込んだときのためだ。捕まるのは自分だけでい

美也子は股間にぶら下がった金玉を軽くひっぱたいた。

「くはっ!」

新たな痛みに、勲が目をさました。 金玉はぶらぶらと左右に揺れている。 目の前に美也子がし

やがんでいるのがぼんやりと見えた。 次第に意識が戻るにつれ、 勲は自分のおかれている立場を

理解したようだ。

「ちょっ、ちょうまち、まってくれ、

な、

なぁ、

ど、どうするつもりなん?」

始めの頃の大きな態度は消え、 勲の目は怯えていた。

美也子が勲の金玉をひっぱたいた。

パッシーン! パ ッシーン! パッシーン!

「はっ、くっ、はぅっ! くはあっ!」

気が引いてゆく勲の顔とは対照的に、彼のモノは、はち切れそうなほどいきり立っていた。 美也子は何度も何度もひっぱたいた。勲の金玉はリズミカルに左右に大きく揺れている。 口 か 血の

らは涎を垂らし、充血した目は焦点があっていない。

「あらあら、男前が台なしねえ」

美也子は勲の頬を撫でながらいっ

「どうしたの? 顔色が悪い わよ? 男でしょう? しっかりしなさい

彼女の手が勲の胸をなぞり、 見事に割れた腹筋を撫でる。

静かに立ち上がる。

「筋肉がなんだって言うの?」

パッチーン!

勲の金玉を蹴り上げる。

「つがあつ!!」

「男がなんだって言うの?」

パッチーン!

再び蹴り上げた。

「うぅぅっ・・・うぐっ・・うっく・・・っ」

けられたことはなかった。 えたのだ。せめてもの彼の男としての意地だった。 モノは堅くなっていく。何度か叩かれているうちに逝きそうにもなった。 地獄だった。勲はろくに口を聞くこともできなくなっていた。今まで、これほど金玉を痛め いっそ殺してくれと思う。だが、金玉を痛めつけられるほどに、彼の すんでの所で何とか堪

両足をロ 今の勲には出来なかった。 っこうになった。腫れ上がった勲の金玉がマットの上に鎮座している。自力で足を閉じる事すら、 美也子が傍らに置いてあったハサミを拾うと、勲の足を固定しているガムテープを切り裂き、 ープから外してやった。両腕は固定されたままなので、まるで万歳をしているようなか

「つうううう・ 美也子は大きく広げられたままの勲の両足の間に立ち、 静か に右足を彼の金玉の上に乗せた。

転がす。 勲が微かに呻いた。そのまま、 感触を楽しむかのようにゆっくりと足に力を込め、 グリグリと

「あつ、あああつ・・・」

た。電気あんまだ。 そしれ、投げ出された勲の両足を小脇に抱え込み、 右足を細かく、 かつ、 力を込めて振動させ

「あぁっ、くっくうっ、やっやめっ、あぁっ!!」

勲は必死に何かを堪えていた。男としての最後のプライドだった。

だが、美也子の電気あんまは容赦なく彼の股間を刺激し続け、次第に強くなってい

「あっ、あぁっ、あぁぁぁ、あっ、もっ、もうっあかんっ!!」

らされた。発射された精液は彼女の顔に掛かるほどの勢いを持っていた。 凄まじい噴射だった。美也子が今まで見たこともない様な量の勲の精液が盛大にあたりにまき散

最後の一滴まで吐き出すと勲の眼球はひっくり返り、 軽く痙攣を始めた。

「凄い・・。こんなに入っているモノなの・・・」

美也子は勲の両足を抱えたまま、しばらく呆然としていた・・・。

数日後、 からの音を遮断する。 大きなマンションの一室に美也子は引っ越していた。 もちろん中の音も 分厚い壁と防音の窓ガラスは

けている。 広々とした明るいリビングの窓際にソファーが置かれ、 窓の外を眺めながら、 右手にはワイン、 左手には細いロープを握っている。 白いドレスを来た美也子が優雅に腰掛 美也子の

りと飲むのが、彼女の休日の日課であり、最高の楽しみだった。ロープに引っ張られ、勲が悲鳴を上げる。その悲鳴を肴にワインをゆっくしっかりと左右に分けるように縛られている鈴のようだ。美也子が強くロープを引けば、金玉は恨るロープの先には勲の金玉があった。ソファーの傍らに素っ裸で立ち、金玉は根本と真ん中で握るロープの先には勲の金玉があった。ソファーの傍らに素っ裸で立ち、金玉は根本と真ん中で

- 21 -